

## 美術団体の解剖（二）

帝展改組の煽りで多年伝統を誇る春陽会も会員間の内訌ないこうをすっかり暴露してしまつた。一昨年林倭衛氏一派の脱退騒ぎの際に林氏に好意をもち、会の林氏に対する処置に不満を抱いたのは他ならぬ元老山本鼎、長谷川昇両氏であつたが、それが新帝展に参与として迎へられたので、両氏は渡りに船とばかり鞍替をする事になつたのも道理である。指定になつた山崎省三も親交のある山本氏と一蓮托生と会員を脱退してしまつた。

此処で多年同人等と面白くなかつた残留組の連中は目の上の瘤としてゐた三人が脱退してくれたことは、もつての幸い将来会を經營する上に非常に好都合と、内心ひそかに祝福してゐることだらう。これは元老小杉（未醒）氏が「会としては三人を快く帝展に送る積りだ」と云つてゐるのを思ひあわせれば合点のゆくことだ。そこで今後会の經營を實際に切り回してゆくのは会員木村莊八、石井鶴三、の両氏あたり見るが至当だらう。放庵氏は芸術至上主義で至つて面倒臭がりやで先づ隠居格。倉田白羊氏は悠々自適に信州の山奥に引籠もつてゐるし、中川一政、足立源一郎氏は好人物と云ふだけで会を動かす意見の持ち合せはないといふ点から綜合すればうなづける。

春陽会の展覧会も年々不振の聲があつたが昨年は中堅の水谷清、鳥海青児氏あたりが力作を見せ、一般出品も概してレベルの向上を示したので總体的に好評を得た。しかし、世評は一般出品に比して会員が振はないと非難されてをり、あまつさへ会員山本、長谷川、山崎の三氏を失つた今日、展覧会をより精彩あるものにするには、会員たるもの緊禪一番の時である。

（『美術通信』 昭和十一年一月十一日）

\*内訌＝内輪揉め